

# ＜主観的把握＞

## ——認知言語学から見た日本語話者の一側面

池 上 嘉 彦

### 1. 言語学のもっとも新しい流れとしての＜認知言語学＞

＜認知言語学＞は 1980 年代頃から、当時の主流であった言語学の姿勢に対して言語研究のさまざまな分野において感じられていた反省の気運とそれに基づいての新しい研究態度の模索が少しずつまとまり始め、次第に大きなうねりを形成するようになったものである。常識的なことばで言うならば、その基本的な姿勢は、＜ことば＞を使う＜ひと＞（もう少し具体的に言うならば、＜ことば＞を使う＜ひと＞の＜ところ＞の働き）との関連で＜ことば＞を考えてみるということである。つまり、従来、＜ひと＞という存在は厳密な科学的研究に馴染まないということで出来るだけ排除すべきものと見なされがちであったのに対して、＜ことば＞というものが＜ひと＞によって使われるものである以上——ちょうど、＜ひと＞によって使われる＜道具＞ならすべて＜ひと＞がそれに対して想定する＜用途＞に合うようなくすがた＞をとるのが当然であるのと同じように——＜ことば＞もその＜くすがた＞には、それを使うひとのあらゆる思惑（あるいは＜ところ＞の働き）の刻印が認められるはずだと考えるのである。いくらか術語的な言い方をすれば、＜言語＞（の仕組み）は＜人間＞の＜認知＞（の営み）によって動機づけられている、というのがその基本的な姿勢である。

日本語との関連で一言つけ加えておくと、＜ところ＞との関わりにおいて＜ことば＞を考えるという＜認知言語学＞の基本的な姿勢が日本語のような言語の研究にはよく馴染むということは明らかであろう。談話レベルでの言語表現が処理される際には、聞き手、あるいは読み手にはその言語表現の文字通りの意味にとどまらず、それを越えた意味をも読み込むことが期待されている。大切なのは、このこと自体はどの言語にも当てはまることではあるが、例えば西欧的な言語の場合と較べてみて、日本語話者はこの点において、より多くの主体的な営みをするのが期待されているということも、経験的事実として明らかであろう。コミュニケーションの成立のために、＜ことば＞そのものの意味を踏まえながらも、それを時には遙かに超える豊かな意味を＜ひと＞の＜ところ＞の働きを通して、創出することを前提としているという意味で、日本語は＜認知言語学＞の姿勢とは密接な親近性を有していると言える。（同じことは、西欧的な言語ほど文法上の明示性に拘らない中国語のような言語についても、相対的に当てはまるはずである。）

### 2. ＜発話＞に先立っての＜事態把握＞という話者の＜主体的＞な営み

ここで言う＜事態把握＞は、＜ひと＞の＜ことば＞への関わりに注目する＜認知言語学＞の基本的な姿勢を特徴づけるもっとも重要な概念の一つである。すなわち、話者は言

語使用に先立って、

- (i) まず、言語化しようとする＜事態＞のどの部分を言語化し、どの部分を言語化しないか、また、言語化する部分については、それをどのような視点から言語化するか——要するに、言語化しようとする＜事態＞を自らとの関連でどう把握するか——という＜認知的＞な営みを＜主体的＞に行ない（〔事態把握〕）、
- (ii) その上で、自らの＜事態把握＞の仕方にふさわしい表現の仕方を選び、言語化する〔＜発話＞〕、

ということである。

この際には、たとえ言語化しようとする＜事態＞が同一であっても、話者がそれを自分との関連でどう捉えるかによって、いくつかの違った表現形式——例えば、自動詞を使うか、他動詞を使うか、「皿が割れました」－「皿を割りました」、能動態で表現するか、受動態で表現するか（「太郎が次郎をなぐる」－「次郎が太郎になぐられる」）など——によって言語化されうる。この場合、違った言語化の仕方は話者による違った＜事態把握＞を反映しており、その意味で＜意味＞も違うと考える。つまり、ある＜事態＞の＜意味＞は問題の＜事態＞そのものに客観的に内在しているのではなく、話者が自分との関連でその＜事態＞から＜主体的＞に創出するもの——＜認知言語学＞は、＜意味＞の本質をこのように捉える。

### 3. 異なる言語の話者によって異なる＜好まれる言い回し＞

どの言語の話者であっても、上述の通り、ある一つの＜事態＞をいくつかの違ったやり方で＜把握＞し、いくつかの違ったやり方で言語化する能力を有している。しかし、異なる言語の話者の間では、同じ＜事態＞であっても、それをどういうやり方で＜把握＞し、どういうやり方で言語化するかについては好みが違うということがある。（例えば、日本語話者なら、「彼は戦争で死にました」、「（私は）知らせを聞いて驚きました」、「（私は）財布を盗まれました」、「ここはどこですか」などと言うのに対して、英語話者なら同じ事態に際して、それぞれ（日本語に直訳すると）「彼ハ戦争デ殺サレマシタ」、「私ハ知ラセヲ聞イテ驚カサレマシタ」、「誰カガ私ノ財布ヲ盗ミマシタ」、「私ハドコニイマスカ」といったような言い回しをするのが普通である。）つまり、ある＜事態＞をどう把握し、どう言語化するかについては、異なる言語の話者の間で好みの違うということである。（言うまでもなく、母語以外の言語の学習に際しては、この点について留意することは大変重要である。さもないと、文法的に正しくても＜不自然＞な表現が気づかれずに使われてしまうことになる。）

### 4. ＜主観的把握＞と＜客観的把握＞

異なる言語の話者の間での＜事態把握＞の仕方についての好みの違いは、言語のさまざまなレベルで起こりうる。以下で取りあげる＜主観的把握＞と＜客観的把握＞という対立は、実は話者による＜事態把握＞の営みのもっとも根底的な段階で起る区別と言ってよい。可能な限り術語的な表現を避けて言うと、この二つの＜事態把握＞の型は次のように説明することができる：

<主観的把握>：話者が問題の事態の中に自らの身を置き、その事態の当事者として体験的に事態把握をする場合。実際には話者が問題の事態の中に身を置いていない場合であっても、話者は自らがその事態に臨場する当事者であるかのように体験的に事態把握をする。

<客観的把握>：話者が問題の事態の外に自らの身を置き、その事態の傍観者、ないし観察者として客観的に事態把握をする場合。実際には問題の事態の中に身を置いていない場合であっても、話者は(自分の分身をその事態の中に残したまま)自らはその事態から抜け出し、事態の外に身を置いて、傍観者、ないし観察者として客観的に(自分の分身を含む)事態を把握する。

具体的な例で検討してみよう。次の(1a)は川端康成の『雪国』の冒頭の文、(1b)はエドワード・サイデンスティッカーによるその英語訳をある程度直訳的に和訳したものである：

- (1)a. 国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。 (川端康成『雪国』の冒頭)  
b. [英語の和訳] 汽車ハ長イトンネルヲ出テ雪国ヘ入ッテキタ。  
(E. Seidensticker 訳)

(1a)も(1b)も、<主人公の乗った汽車がトンネルを抜けて雪国へ入った>という事態を言語化しているという点では同じである。しかし、同じ事態を言語化しながら、どうして(1a)では<汽車>が言語化されていないのに、(1b)ではそれが明示的に言語化されているのか。答えは原作者と英訳者とで <事態把握>の仕方が違うからである。原作者は<主観的把握>によって言語化している——つまり、主人公が自らの体験している事態の中に身を置いたまま、自らの体験していることを言語化するという構図である。(その証拠に、(1a)は主人公の独白、心の中でのつぶやき、のようにも読める。)ここでは、主人公(事態を把握する<主体>)が問題の事態(把握される<客体>)に臨場するという<主客合一>の状況が演出されている。それに対し、英訳者は、同じ事態を<客観的把握>によって言語化している——つまり、主人公の分身が主人公の体験している事態から抜け出し、残された自分のもう一つの分身を含んだ事態を外から眺め、言語化するという構図である。(外に立つ主人公の分身にとって、当然、汽車は見える客体として言語化される。)ここでは、主人公(事態を把握する<主体>)が問題の事態(把握される<客体>)の外に身を置いているという<主客対立>の状況が演出されている。川端康成自身の次のことば(「新進作家の新傾向解説」1924)も十分この点についての参考になるであろう。

例へば、野に一輪の白百合が咲いてゐる。この百合の見方は三通りしかない。百合を認めた時の気持は三通りしかない。百合の内に私があるのか。私の内に百合があるのか。または、百合と私とが別々にあるのか。これは哲学上の認識論の問題である。だから、ここで詳しくは云はず、文芸の表現の問題として、分り易く考へてみる。

百合と私とが別々にあると考へて百合を描くのは、自然主義的な書き方である。古い客観主義である。これまでの文芸の表現は、すべてこれだったと云つていい。

ところが、主観の力はそれで満足しなくなった。百合の内に私がある。私の内に百合がある。この二つは結局同じである。そして、この気持で物を書き現さうとするところに、新主観主義的表現の根拠があるのである。その最も著しいのがドイツの表現主義である。

日本語を母語とする話者にとっては、(1a)のようなく主観的把握>に基づく言語化であっても、それが何か理解に特別な困難を伴うといった経験をすることは普通ない。しかし、西欧的な言語の話者にとっては、必ずしもそうではないようである。アルゼンチン出身の日本語作家、ドメニコ・ラガナ氏は、日本語学習のまだ初期の頃、次の幸田文の小説『流れる』の冒頭の文章について、「おどろいたことには、それぞれの単語の意味はわかっても、全体の意味はどうしてもつかめなかった」と告白している（ドメニコ・ラガナ『日本語とわたし』1975）：

(2) このうちに相違ないが、どこからはいつていいか、勝手口がなかった。

この文章も、実は<主観的把握>に基づいて言語化されたものである。（先程の(1a)と同様、主人公の独白、心の中でのつぶやき、とも読めることに注意。）主人公は事態を把握する<主体>であり、把握される<客体>としての事態の一部ではない。従って自らの言語化の対象にはならない。主人公は自分自身の体験の内容を誰かに伝達するという意図なしに独り言のように語っているのであるから、自分自身を明示的に言語化する必要はないし、また、言語化しない方が<主観的把握>に基づく文としては自然なのである。しかし、西欧的な言語の話者として何らかの明示的なく主語>の存在に拘るラガナ氏は、文章中の「相違」という語を<主語>と断定し、必要以上の混乱に陥ってしまうのである。

このように見てくると、日本語話者の特徴的な振舞いとしてしばしば言及される<主語>の省略も、実は日本語話者における<主観的把握>の好みと密接に関係するということに気づくであろう。もう少し英語話者好みの表現との対比で具体例を見てみよう：

(3) a. 外へ出ると、月が明るく輝いていた。

b. [英語の和訳] 私ガ外へ出タ時、私ハ月ガ明ルク輝イテイルノヲ見タ。

(4) a. まづ高館に登れば北上川、南部より流るる大河なり。（芭蕉『奥の細道』）

b. [英語の和訳] 私タチハマズ高館ニ登ッタ。私タチハソコカラ北上川、南部ヨリ流レテクル大河、ヲ見ルコトガデキタ。（D. Keene 訳）

(3a)と(4a)の日本語の表現は<主観的把握>に基づくもので、話者は現場に身を置いて、自分に見えていることを言語化する一方、自分自身は言語化していない。対応する英語表現は、それをさらに和訳した(3b)、(4b)からも分かる通り、<客観的把握>に基づくものになっている。話者は（自分の分身を現場に残したまま）現場の外に身を置き、自分に見えていることと同時に、見ている自分をも言語化している。

日本語話者が＜主観的把握＞を好んでするという傾向が認められるのは、話し手、あるいは書き手として、ある事態を言語化する場合に限らない。聞き手、あるいは読み手として、ある事態を言語化している表現に接する場合にどういう解釈をするかという場合にも同じ好みを認めることができる。例えば、(5)はよく知られた小学校唱歌の一部であるが、日本語話者は歌いながら通常ある種の感動を覚える：

- (5) 海は広いな、大きいな。  
月が昇るし、日が沈む。

興味深いことに、中国の日本語学習者はこの同じ表現に特に感動する様子はないとのことである。日本語話者はこの表現を＜主観的把握＞に基づく言語化として——つまり、単なる情景描写ではなく、その場にその情景を見て感動している発話者を想定して——読むのであろう。そしてすぐ自ら自身をも同じ場に置いてみて（あるいは、その発話者に自分を同化して）情景に感動しているもう一人の発話者になるのであろう。＜客観的把握＞に基づく言語化として受けとめられるならば、この表現は確かに誰もが知っていることを述べた平凡な内容のものとしか受けとめられないことになる。同じことは、俳句とどう向かい合うかということでも起こる。(6)は有名な芭蕉の句であるが、この英語訳を見たアメリカの学生の平均的な反応は「それがどうしたの？」という問い返しであるという：

- (6) 古池や 蛙とびこむ 水の音

## 5. 日本語に深く組み込まれた＜主観的把握＞

＜ひと＞の使う＜ことば＞についての興味ある一つのパラドックスは、典型的に＜主観的把握＞に基づく言語化と典型的に＜客観的把握＞に基づく言語化とが、結果的にはまったく同一の表現になりうるということである。例えば「雨が降っている」という表現は、話し手／書き手の立場からいうならば＜主観的把握＞の場合（つまり、話者が自らの体験していることとして事態を語っている場合）でも、また、＜客観的把握＞の場合（つまり、話者が自らとは関わりのないこととして事態を語っている場合）でもありうる。聞き手／読み手の立場からしても「雨が降っている」という表現はそれ自体としては同じ二通りの読み方を許容するが、時にはどちらの読み方をすべきか、手掛かりが与えられていることもある。例えば、上の(5)のように表現の中に感動を暗示する終助詞が含まれていれば、特定の発話者と結びついた＜主観的把握＞と判断できるし、また(6)のように俳句の作品であるという情報も、特定の作家の体験と結びついた＜主観的把握＞であろうことを暗示してくれる。しかし、究極的には、聞き手／読み手としての話者自身がどれ位容易に表現そのものには不在の他者なる言語化の＜主体＞に自らを投入し、共感する性向を有するかが関わってくることになる。そして、この点に関しては、個人差ばかりでなく、異なる言語、異なる文化の担い手の間でも差があるのではないかと思われる。

ただし、注意しておくべきことは、一見単なる情景描写と思える表現にその情景といわば一体化し、埋め込まれてしまっている＜ひと＞を読みとるという能力自体は普遍的なも

のではないかということである。〈ひと〉が環境の中を移動する時、〈ひと〉は環境の〈見え〉が自らの移動に伴って変化することを体験する。〈見え〉の変化によって自らの動き方を知ることができるわけである。さらに、こういう体験に基づいて、〈ひと〉は〈見え〉の変化を言語化することによって、自らの動きを伝えることもできる。例えば、「前方の塔がどんどん近づいてきた」と言えば、実は言ったひとが塔に向かってまっしぐらに進んでいるということが読みとれる。しかも、この表現は〈見え〉を言語化しているだけであるから、〈見え〉に入らない本人自身は言語化されていない。このような状況は、さらに動きを伴わない場合にまで拡張して考えることができる。〈ひと〉は自分の気持や気分が違うと、環境の〈見え〉も違ってくことも体験する。そうすると、環境の〈見え〉の変化を言語化することによって、自らの気持や気分の変化を間接的に表現することもできるわけである。例えば「花の色も移りにけりな」と〈見え〉を言語化することによって、自らの容色の衰えを間接的に語ることも可能である。この場合も表現されるのは環境の〈見え〉だけで、当事者である本人は言語化されないままである。ただ、この種の把握の仕方がどの程度好んでなされ、どのように評価されるかについては、異なる言語の話者の間では決して同じではないであろう。〈主観的把握〉は日本語話者好みの事態把握の仕方であり、それに基づく言い回しは日本語による表現の中に深く組み込まれているのである。

## 参考文献

- 池上嘉彦 2000 『「日本語論」への招待』（特に、第三部「日本語の主観性と主語の省略」pp. 237-310）講談社。（2007年「ちくま学芸文庫」に収録）
- ..... 2003, 2004 「日本語の〈主観性〉と〈主観性〉の指標(1)-(2)『認知言語学論考』3: 1-54, 『認知言語学論考』4: 1-60.
- ..... ほか 2006 「特集：〈いま〉と〈ここ〉の言語学 — ことばの〈主観性〉をめぐって」『言語』2006年5月号 pp.20-81.

（本稿は、2007年3月24日、上海外国語大学で開催された「日本学研究国際シンポジウム」での講演の要約である。）